

韓国教育課程評価院 (Korea Institute of Curriculum and Evaluation, KICE)

URL: <http://www.kice.ac.kr/>

訪問日時: 2008年3月21日(金) 14:00~16:30

訪問者: 渡辺 達雄、林 篤裕

応対者: Lee, Kun-Nim (Head, Department of External Relations)

Lee, Yang-Rak (Senior Research Fellow)

Lee, YongBaek (研究員)

Jeong, Young-Keun (研究員)

大澤 公一 (訪問研究員, 東大院生)

MIN, Byungsoo (Project Co-ordinator)

1) 概要

韓国の大学入試のための統一試験「大学修学能力試験(College Scholastic Ability Test, 以下 CSAT と略)」は、韓国教育課程評価院(以下 KICE と略)が運営・実施している。元々、KICE は国の機関として発足したが、1998年にエージェンシー化され、現在に至っている点では我が国の大学入試センターと似た面もあるが、名称からも判るように、試験だけでなく教育課程の策定にも関与している機関であるので、大学入試センターとは少し性格が異なる。

韓国では大学が実施する個別試験において、実技や小論文、面接と言った試験を行なうことが多いため、CSAT が主たる筆記試験となる。以前は総合型試験であったが、第7次のカリキュラムの改訂に合わせて、2004年からは8領域(言語、数理、社会探求、科学探求、職業探求、外国語(英語)、第2外国語、漢文。計48科目)で構成される科目型試験となり、受験者はこれらの中から志願する大学の指定科目を選択して受験する。CSAT は11月に1日間で実施され、追試験はない。

韓国の教育制度は、政権に左右される部分があり、2008年2月下旬に新政権が誕生した直後に訪問したこともあって、不透明な部分もあった。

2) CSAT が高校教育に及ぼしている影響

韓国では、以前の日本と同様かそれ以上に学歴を重んじる風潮があるため、大学への入学準備段階である後期中等教育における受験勉強熱は非常に高い。当然 CSAT の

高校教育への影響も大変大きく、例えば特定の科目が受験科目に含まれるかどうかは大きな変化をもたらす。

前政権では、CSAT の影響を減らして高校の内申書に重点を置いた選抜を推奨した。しかし、高校間格差の問題から、内申書の点数を単純には比較することができず、優秀な高校(科学高校や外国語高校)に在籍している場合、相対的に内申点が低くなってしまいうことも発生するため、優秀な学生を大学に入学させるためにも、大学側では内申書の比重を下げた選抜方法を探っていた。

また、CSAT だけで入学できた時期もあったが、現在は CSAT 以外に、内申書や記述試験の成績も評価に使うので、受験者の負担が大きく、高校で補習を行っていると共に、私教育や塾で勉強しないと合格できないといった状況にもなっている。

3) CSAT の各大学での利用方法

試験成績は、実施 1 ヶ月程後に KICE から受験者と各大学に通知される。以前は「素点」も提供されていたが、現在は「等級点(Stanine と呼ばれる 9 段階のレベル)」と「百分率点」が提供される。

試験実施時期との関係もあるが、随時募集では内申書を重視し、定時募集では内申書以外に、論述試験や CSAT の成績を総合的に判断して合否を決定する。各々の選抜資料をどのような比重で取り扱うかは各大学に依って異なっており、利用方法をまとめた冊子が大学教育協議会(後述)から出ているとのことであった。

4) CSAT の出題範囲と高校教育との関係や水準

基本的には高校教育課程(National Curriculum)の中で出題されるが、言語領域と外国語(英語)領域は指導要領にはとらわれずに、いろいろな素材を用いて出題している。出題単元としては「高 2、高 3 の範囲(深化科目と呼ばれる)」の中から出題される。難易度は平均点が 6 割を目指して出題されるが、言語領域と第二外国語領域はやや高く、逆に、数理領域、科学探求領域と職業探求領域はやや低めを目指している。言語領域は第 1 時限目に実施されることを考慮して、やや易しくしている。

素点は提供されていないので、平均点自身も公表されない。Stanine のレベル 1 がトップ 4%なので、程ほどに難しい問題も必要になる。問題数が 20 問しかない領域もあり、難易度の調整は容易ではない。

5) CSAT の将来構想

新政権では、受験者の負担を軽減する目的で CSAT を易化(平均点を上げる)しようと考えている。また同様の目的のために、2012 年からは言語、数理、外国語(英語)領域を必須科目とした最大で 5 科目程度の受験で合否判定をするように受験科目数を減らす予定でもある(現状では難関大学の場合、7~8 科目を必要としている)。また、2013 年からは CSAT から英語を除外して、外部の英語検定(TOEIC や TOEFL 等の認定試験)で行う予定である。

しかし、これらの施策は検討を深める前に発表されてしまったきらいがあり、実際どのように実現されていくかは不透明な部分もある。CSAT に含まれないとその科目の勉強をしなくなり、学力低下や理数系離れに拍車がかかるのではないかと危惧があるようだ。

加えて、2014 年から開始される新課程と CSAT との関係をどのようにマッチングさせて実施するかも現時点ではまだ決まっていないとのことであった。

6) 高校と大学を連携した協議機関

今までは教育部(日本の文部科学省)が中心となって協議を行ってきたが、新政権では大学の自律を目指して、「大学教育協議会」で協議することとなった。従来、大学教育協議会は大学の学長を中心とした組織であったが、今後は、高校教員や指導教育長等を含めて話し合う場として機能させて行く予定である。

ただし、韓国では多くのものがソウル近郊に集中しており、大学もその例外ではなく、この協議会もソウルを中心とした物事の方向性になりがちな面もあり、地方の大学からは反発もあるようで、今後は不透明な部分もある。

7) 高大接続についての問題点や改良点

韓国は少子化と進学率の上昇により、短大を含めて既に全入時代になっており、下位大学は学生の募集に苦労している。定員一杯を募集しない大学(5 割程度に留める)や合併する大学、教員を削減する大学等も出てきている。

また少子化により、親が子供にかかる教育費が増加しており、保護者の大きな負担となっている。「英語教育重視」を謳った大学が出てくると、そこへの入学を目指して

幼稚園から英語を教育すると言った、過敏とも思える反応も生まれる。韓国では、「教育問題」が「社会問題」を引き起こすことが少なくない。

最近では理数系離れが顕著で、理系科目を選択している高校生の割合が 60%('70), 50%('93), 43%(現在) と減少傾向である。また、理系に進学する際に必要になると思われる CSAT の科目(難しい方の科目)である「数学 2」の受験者は 10%、「物理 2」の受験者も 5%しかいない。これらの弊害として、理系学部であるにも関わらず、数学や理科の大学での授業が成立しない例や、数学や理科科目を未履修の学生が理系学部に合格できてしまう例等があるようだ。

第 7 次以前の教育課程では、高校 2 年生に進学する時点で、文系/理系を選択させていたが、現在はそのようなことがないので、学生は易しい科目を選択履修する傾向にある。このようなことから学力低下が起っており、CSAT を易しくしたことも影響してか、トップ大学でも学力低下が問題視されるようになってきている。これへの対策として、数理領域や科学探求領域の難しい方の科目を選択した学生には何らかのインセンティブを与えてはどうかと言った意見もあるようだ。

私教育や塾・家庭教師の影響を減らしたいという目的のために、CSAT を易しくしたが、実際は CSAT を易しくしたからと言って、受験競争が緩和されたり、私教育が減るようなことはなかった。むしろ易化したことにより、1 つのミスが成績評価に大きく影響するようになり、より競争が激化し、如何にミスをしないように解答するか等、教育とは異なる面に注力するような状況も生まれている。

Stanine は 9 段階の等級であり、等級の区切り(閾値)近傍で評価が変わるため、1 点の違いで等級が 1 つ異なったり、1 つの等級内でも最高点と最低点には差がある等の不満も多い。

試験制度の変化がどのような状況を招くかを調べるためには、大学入学から卒業までの追跡調査を行うべきであるが、大学側がデータを公開しないので、詳細は不明のままである。基礎的な科目を勉強していないために講義に付いて行けずに、退学したり就職できないと言う事例も大学関係者から漏れ聞こえてくるとのことであった。